



研究ノート

外国人留学生を指導して

森 永 規 彦*

最近の日本が、世界的に見た場合の先進国であるかどうかについては、各人各様、感じ方の相違のかなりあるところであるが、先進国首脳会議などと政府筋がよく言うほどには、一般国民は素直にそうとは思っていないようだ。しかし、高度な科学技術を基盤とする世界的な工業先進国であるという見方については、まず異論もないところであろう。そういうわけで、この科学技術の分野においては、日本への留学を希望する外国人留学生の数は年々増加の一途をたどっており、また一昨年から、中国からの留学生も正式に受け入れる制度もでき、その第一陣は総勢 426 人で、昨年、日本にやってきたところである。

筆者の所属する通信工学科滑川研究室では、随分前から外国人留学生の往来がかなりあり、ちょっと掲げてみても、トルコ、パキスタン、タイ、ビルマ、ルーマニア、イラン、韓国、ヨルダン、中国などとなり、いつも国際的な雰囲気の中にある。本稿では、この内、筆者が直接研究指導を担当した留学生との付き合いの一端を紹介したいと思う。

筆者が最初に担当した留学生は、1971年のタイのプラシット君で、フルネームをプラシット・プラピンモンコルカーンと言う。セカンドネームはこのような大変長いのが普通で、タイでは、日本の場合と違って、ファーストネームを日常の呼び名としていることも初めて知った。彼はタイ人といっても中国系タイ人で、華商の息子である。それだけ漢字に強く、最初から並の日本人よりも余程正確できれいな字を書いた。タイ随一のチュラロンコーン大学を卒業して直ぐに、文部省国費留学生として当修士課

程に入学した秀才で、1976年3月に当博士課程を修了するまでの大学院5年間にわたる長い付き合いとなった。

タイは過去において幾度か独立を脅やかされたことがあったが、今日まで独立を維持してきた東南アジアにおける唯一の国であり、誇り高い優秀な国民であることは聞いていたが、彼も評判通りの秀れた人物で紳士であった。

大変な勉強家で、筆者を相手に夜遅くまで議論し、仲々家へ帰らせてくれず、空腹に参った筆者がストップをかけ、明日まわしにしてくれと頼み込んだこともしばしばであった。また彼は、他のタイ人留学生の面倒をよくみる心の優しい人物で、留学生間にも圧倒的な人気があった。あるときなど、筆者の息子が重い肺炎を患って入院していたとき、大病院のややこしい病室を一人で訪ねてきてくれ、まだ余り上手でない日本語で一生懸命励ましてもくれた。

こんな立派な彼にも、筆者から見えて一つ心配なことがあった。それは、南千里にある留学生会館との往復の時間がもったいないということで、中古の自動車を手に入れたのはよかったのだが、この紳士もどういうわけか、ハンドルを握るとかなりの荒い運転をする。タイではこれで普通だと言うが、ここは日本で、道路も狭く危険で、交通規制も厳しいからと再三注意していたが、あるとき大阪の南はずれで、軽くすんでよかったけれども、追突事故を起してしまった。事故に会った相手は、変な言葉を話す変な日本人ということで、最初はひどく怒っていたそうだが、警官からこれは外国人だと教えられてからは、諦めの境地になったのか、弁償も請求せずにすませてくれた。あとで警察からの呼び出しがあったときには、筆者が警察署長宛に一筆書いた書状を持たせ、平身低頭で行くようにとアドバイスして行かせたところ、そのか

*森永規彦 (Norihiko MORINAGA), 大阪大学工学部、通信工学科、講師、工学博士、通信工学

い(?) あってか何の処分もなく、忠告されただけで帰ってきた。日本人にとっては羨ましい話ではある。

この彼が帰国する前になって、タイに軍事クーデターが勃発し、軍事政権が新しく成立するという事件が起った。彼との日常の付き合いからは、タイと日本との間の違和感など全くと言っていいほど感じられなかったが、この事件によって改めて、タイの置かれている日本とは異なる厳しい国内及び国際情勢を再認識させられた。この軍事政権に反対する学生運動も各大学で盛んだと聞いたので、純粋な彼がラジカルな運動に巻き込まれないようにと、帰国寸前の彼に、タイをもっと長い目で見ると、滑川教授と二人でいろいろと話し聞かせたことを覚えている。

いま彼は、一橋大学の大学院(経済学専攻)に留学していたヤダさんと結婚し、男の赤ちゃんにも恵まれ、母校チュラロンコン大学の教官として精力的に活躍している。

プラシット君が卒業した1976年の4月からは、博士課程に入学したイランのアラスト君の指導を担当した。テヘラン大学で地球物理を専攻し、修士の学位を得てイラン国営放送局に勤めていた。

もともとイランは後進的農業国であったが、1960年代後半からは、ご存知のように、オイルダラーを背景に急速な工業化の道を歩んでいたわけで、当時の、親日家でもあったパーレビー国王の影響もあって、技術者の日本留学を勧めていた状況にあったようだ。

日本人から見れば、どうしても古代ペルシャ帝国が頭に浮んでくるイラン、イラン人から見れば、木と紙でできた家の立つ神秘的な極東の一小国日本といった具合に、互いに遠く離れた国であるが故に、かなりの生活様式の違いや理解不足のあるのはむしろ当然で、このアラスト君も、仲々顔には出さないが、慣れるのに随分苦労したらしい。

大抵のイラン人がそうであるように、彼も熱心なイスラム教徒(ムスリム)で、少なくとも日本に来た初めの頃は、毎日5回の礼拝も欠かさず行っていたようだし、宗教的に禁じられ

ている酒もタバコもやらなかった。もちろん豚肉はだめで、ビーフステーキも日本へ来て初めて食べたと言う。ところで食事のことでよく聞かされたのがイランでの羊肉料理のおいしさで、ビーフよりもっとやわらかく、スプーンで十分肉がほぐれ、ナイフなどいらぬと彼は言うのだが。

この敬けんなムスリムも、一年ほどたつと日本人流にほどけてきた。酒もタバコものむようになったし、一日何回かの礼拝もどうやら怪しくなった。日本人流の自由さを満喫しているようだった。イスラムの厳しい戒律も、この自由な日本では力が失せてしまうらしい。しかし、神も仏も信じない筆者が、なるほどイスラム教は中東の生活環境に合理的に根ざした宗教だと感心したのは、断食の内容を知ってからだ。

コーランに定めた断食の期間は、イスラム暦9月のラマダンの30日間の日中が当てられる。イスラム暦は陰暦であるため、太陽暦を基準にしてみると、ラマダン月が一年中のどんな季節にもなり得る。したがって、ある年は真冬の30日間かも知れないし、またその次の年は真夏の30日間かも知れない。つまり、厳しい砂漠に囲まれた風土で生活してゆく上では、いつ何時、砂漠に迷い込むとも限らない。一年中のどんな時期に、このような目に会っても、少なくともひと月ぐらひは生き長らえるだけの心身のトレーニングだと解釈できる。宗教=生活の知恵、だ。

断食といっても、子供、病人、長旅をしている者は除かれるし、なるほど日中は水を飲むことも禁じられているが、夜に入ると食事にも自由にとれるという具合にちゃんと合理的にできている。アラスト君も、この断食だけはきちんとやっていたようだ。彼に言わせると、また別の意味で、健康にも良いそうだ。どなたか試めされては?

ペルシャ語から日本語へ、地球物理から通信工学へとの大変更、そして留学中に父親が亡くなるという不幸にもめげず、彼もよく努力して1979年3月には工学博士の学位を取得した。普通なら、これで直ぐに帰国して、イランの放送技術分野で活躍してもらおうところだが、例のイ

ラン動乱の影響で帰れなくなった。彼は温厚な性格の持主で、見掛け上は、騒々しいイランへ、ぜがひでも帰りたいという気もなかったようだ。1979年の6月には、アメリカを起点として、(職探しも兼ねた?)世界旅行に出てしまった。どのようなルートをたどったかは定かではないが、結局、イランに入国でき葉書もらった。これでこちらもほっとしたわけだが、昨年春には、中国などを回ってまたひょっこり日本へやってきた。郵便ですらままならぬイランに、よく出たり入ったりできるものだと感じている間に、いつしかイランに帰国し、今度はまた、この4月に、タイなどを經由して再び日本を訪ずれ、いま当研究室の研究生として居る。まことに何んと言うか、たくましさえ感じさせる、ミステリアスな国際人ではある。

今年3月に工学博士の学位を得て、既に帰国した韓国の趙君は、1977年に来日し、1978年4月から博士(後期)課程の学生となった。韓国の漢陽大学を首席で卒業した秀才で、韓国航空大学の教官である。とても礼儀正しい、立派な人物だった。

彼が前の二人の留学生と大きく異なる点は、独身ではなく、奥さんと二人の幼ない息子さん(5歳と2歳)を韓国に残してきた点だった。当然のことながら、家族を日本へ呼びたいと言う。問題は、当時の韓国が、子供まで連れての長期留学を認めていない点にあった。呼ぶにしても、自ずと奥さん一人だけということになる。しかし、これでは小さな子供が余りにかわいそう。ここはひとつ亭主たるものがまんして、夏休みなどに一時帰国する程度にしてはと、相談を受けた筆者は答えたのだが。

韓国は昔の日本と同じように亭主上位にあるようだ。1978年秋には奥さん一人で日本にやって来た。子供二人は妹さんに預けてきたと言う。外国で一人苦勞する主人の身の回りの世話をするのが当たり前で、子供にはその間辛抱させるとのこと。誰かが聞けば羨ましがするような心遣い。しかし、幼ない子供を残してきた夫婦の心情は筆者にもよくわかる。あとは韓国も、もっと自由になるようにと祈るのみだった。

留学生が単身で日本へ来る場合は、留学生会

館で暮らすのが普通で、この場合には経済的な問題は起らない。しかし家族同伴となると、留学生会館には入れず、民間のアパート住いとなる。とたんに、余りにも高い日本の住宅問題に直接さらされる。留学生が、意外な日本社会のゆとりのなさ、貧弱さを身をもって知るのもこのときだ。いかに世界的な経済発展をなし遂げようとも、このゆとりのなさだけは何んともならぬ……アジアの宿命のようなものを感じるわけだ。趙君の場合も例外ではなかった。高い敷金と高い家賃。文部省から支給される奨学金だけでは、いわゆる耐乏生活を強いられる。奥さんもアルバイトをして助けたそうだ。

幸いにも、1979年からは、子供を連れての留学もよいことになった。趙君夫妻が早速二人の子供を呼んだのはもちろんだ。こうしてやっと一家揃っての日本生活が送れるようになった。ゆとりはないが堅実な生活振りで、近所との付き合い、小学校の先生との付き合い(長男は日本の小学校に入学した)もすべてうまくいった。実にすばらしい夫婦だった。

とにかくスケジュール通りにきっちり仕事のできる人で、博士課程入学後、わずか一年半足らずで博士論文の主要部ができてしまった。妻子があって、生活のかかっている人はさすがに意気込みが違う。筆者への毎回の報告書の表紙には、そのテーマの完了日、筆者への提出日がきちんと書かれてある。指導する方も自ずと気合いが入る。充実した、彼との付き合いの毎日だった。

この趙君の場合も、留学中に、政府こそ転覆はしなかったけれど、朴大統領の暗殺事件が起った。どうやら当研究室の留学生にとっては、留学中に何かどえらいことが母国に起るという変なジンクスができたかのようだ。やはりアジア・中近東諸国の政情不安をそのまま物語っているのだろう。

趙君と同じ1978年4月に博士課程に入学したのがヨルダンのマゼン君だ。エジプトのアレキサンドリア大学を卒業後、ヨルダンの電々公社に勤めていた。1975年に来日、大阪外大での日本語レッスンの後、翌年、名古屋工業大学の修士課程に入学し、こちらに来るまでの二年間は

アンテナの研究に従事していた。大阪外大ではイランのアラスト君などと同じだった。当博士課程ではテーマを変えて、通信方式の研究、勉強をしたいと言う。

ヨルダンと言えば、アラビアのローレンスでお馴染み、国土の80%以上が荒涼たるステップ及び砂漠地帯だ。もともとベドウィン(遊牧民)を主体とする小国であったが、1948~49年のパレスティナ戦争の結果、一方で多数のアラブ難民を受け入れ、地方でヨルダン川以西の地区を併合した。約20%がベドウィン、45%がパレスティナ系住民、35%がアラブ難民で、総人口300万人程度。大多数はイスラム教徒だが、約40万人がキリスト教徒という。

マゼン君はベドウィン出身の名家で育ち、数少ないキリスト教徒でもある。風貌といい、考え方といい、生活様式まで、中東的というよりむしろ欧米的である。結婚後、直ぐに日本に来たわけで、奥さんも名古屋で長男を出産した。見ず知らずの国での出産故、精神的にも大変だったろうと容易に察しがつく。料理上手で、子育てに一生懸命の、しんの強い美人だ。

ヨーロッパの国の中にも、昼食を主とする国も多いと聞く。ヨルダンもそうだそうで、彼も昼食をとり正午頃家に帰って2時過ぎ頃にまた大学に戻ってくる。昼食をたっぷりってからまた仕事というのは、筆者にとっては多分、苦痛に近いことだと思うのだが、すべては慣れの問題のようだ。

ヨルダン料理は、よく焼いてあっさりした肉料理が主だ。毎日のように肉料理を食する方からすれば、日本人の好む、いわゆる霜降りの肉では油っこくて胃がもたない。自然とあっさりした肉料理となる。また、それだけ肉の選定には慎重になる。奥さんに言わせれば、店先に並んでいるミンチ肉はとてもだめだそうで、すべて自分で作ると言う。肉料理と一緒に出されるヨルダン風のヨーグルト少し酸味を効かせた自家製のヨーグルトにナスビの細かく刻んだものが混っている一も口によく合う。普通はパンにのせて食べる。

修士課程でやっていた研究テーマを、博士課程に入る時点で変えるなどということは、普通

は大変なことで、このような例は余り見たことがない。余程やる気がないとできないことだ。彼の場合は、大学も、指導教官も全く変わってしまったので、こうならざるを得なかった。かなりのハンディキャップがあるが、覚悟のほどはどうかと尋ねたら、幅広く勉強していた方がヨルダンに帰っても役に立つので、テーマが変ることについてはむしろアクティブに受け取っている。一生懸命やるのでよろしくお願ひしたいという頼もしい返事が返ってきた。覚悟せねばならないのは、どうやら筆者の方だった。

日本語の読み・書きはほとんどだめだが、話す・聞くは実にすばらしい。出発点での不安材料は多々あったけれど、彼の期待通りの努力でほぼスケジュール通り事が運び、博士論文提出のための公聴会も既に終え、いまは論文審査請求の準備中である。

イランのアラスト君も珍しい存在だったが、マゼン君の方がもっと珍しい存在かも知れない。とにかく遠く離れたヨルダンで、初めて誕生する日本製の工学博士であることには間違いなからう。日本の名誉のためにも、今後の活躍を大いに期待したい。

現在、筆者は、中国の留学生、件君の研究指導を始めている。一昨年来日した中国留学生団中のエリートで、修士課程の学生に相当する(中国で言う)研究生18人の内の一人である。西安(昔の長安)にある西北電信工程学院の教官でもある。

いま中国は、文革時代の遅れを取り戻すべく、国を挙げての近代化に取り組んでいる。中国が目指す四つの近代化とは、農業・工業・国防・科学技術を指し、自力更生を基本としている。これからはますます、科学技術分野の留学生が増加するであろう。

いま一人、ヨルダンのマゼン君の弟アムジャド君がいる。ブルガリアのバーナ大学で修士の学位(通信工学専攻)をとり、本年1月に国費留学生として来日したばかりだ。この一年間は、日本語のレッスンと当研究室での基礎勉強に励んでもらうが、来年、首尾よく当博士課程に入学したあかつきには、無線通信の分野での研究指導をすることになっている。

以上、多くの留学生との付き合いを通じて、筆者自身、貴重な体験をしてきた。確か一昨年のNHKの番組で、外国人留学生の問題についての討論会なるものが放送された。その中のある資料によると、日本に留学した留学生の内、半数に近い数の学生が、程度の差こそあれ、反日感情を持って帰国するという。これは何んとも多過ぎる。筆者には全く解しかねる。何かの調査ミスではないのか？

しかし、これは一体どういうことに原因があるのかという意味合いの討論がなされていた。やれ文部省の援助が足りないせいだとか、やれ日本社会が留学生を迎え入れる態勢になっていないせいだとか……出る意見は千差万別、結局、何が原因なのかわからずじまいで終わってしまった。

「反日感情を持つ……余程のことでもなければこうはならないのだが。私費留学生が余程つらい目に会ったのだろうか？指導者の認識不足なのか？とにかく筆者には解せないし、自分が担当した留学生諸君が反日感情を抱いて帰国したなどとは到底思えない。しかし次のようなことは言える……もっとも、反日感情にまで直ぐに結び付くかどうかは疑問だが。

日本をはじめ、アジア・中近東諸国には、もともと欧米崇拜というか、憧れに似た感情がある。その証拠に、欧米諸国に留学した日本人で、その国のことを悪く言う人はほとんどいない。それどころか、アメリカかぶれとか、フランスかぶれとか、世間でよく言われるように、大いにその国の良さを強調する。憧れの国に留学した場合は、大して優遇されなくても、多少

苦労しようとも、不思議なことに、それはそれなりになつかしい思い出として残るらしい。

一方、アジア・中近東諸国から日本へやって来る留学生はどうだろう。多分、彼らも日本人と同じく、欧米に対しては憧れの気持ちはあっても、日本に対してはないだろう。彼らのほとんどが、日本に来るまでは、ちょっとした日本の歴史や地理すらもほとんど知らずにいるという事実からしても明らかだ。こういう場合は事情が異なってくる。ちょっとしたことで悪く解釈してしまいがちになる。文部省の援助が少ないわけでも何んでもない。むしろ文部省はよくしている方だと思う。あれやこれやと考えてもむだで、実はどうしようもないところに原因がある。憧れのまなざしで見られている国とそうでない国との違いだ。

日本は、国際社会における経済利益の環元という意味でも、これら留学生の援助に今後一層の努力を払うべきと考えるが、例え同じように援助したとしても、欧米に対する程良い感情を持って帰国してくれないかも知れない。しかし、だからと言って、それを気にしていても、以上述べた理由で、どうなるというものでもない。それよりも、日本としてもっと大切なことは、来日した留学生には、実質的に立派な成果をあげさせて帰すことと、良きも悪しきも日本社会の現状を正確に理解させるように努めることだと思うのだが。

最後に、留学生の指導に深い理解を示され、筆者に本稿を草する機会を与えられた滑川教授に感謝申し上げる次第である。